

最期まで自分らしく生活することの大切さ

正原沙織

タイトルを見た時、このようなことが出来るのか…と衝撃を受けました。

そして、坂野様とは同じ大学（学部まで同じ！）出身で更に衝撃でした。学生時代のエピソードが印象に残りましたが、行動力がとても素晴らしいと感じました。

祖母（89歳）が、数年前から特養へ入所しています。

10年前にレビー小体型認知症を患い、同居家族への暴言や深夜の徘徊で度々警察のお世話になるなど人格が変わったかのようになり、家族が疲弊し、ようやく見つけた施設へ入所。認知症発症後は祖母に会っていませんでしたが、先日施設で秋祭りがあり、顔を出してきました。

顔や名前は忘れているだろう…と覚悟はしていたものの、祖母は車椅子の上でもベッドに移乗されても、終始傾眠。もはや一言も発せず、会話が出来ませんでした。

入所当時は食事を自分で摂ることが出来たようですが、面影はどこにもなく、健康寿命とは何だろうかと思わされました。

その数日後に今回の話を聴き、（ハード面の課題はあると仰っていましたが）きっと駒場苑の入所者の方は生き生きと生活されているんだろうと推察しました。

最期までやりたいことや好きなことをするのは人生をより豊かに出来ますし、残された能力を活かす＝最期まで自分らしい生活を送るに繋がると思っています。

このレポートを書いている際、トラベルドクターの存在を知りました。「故郷に帰りたい」「温泉に入りたい」と言ったご本人の要望を旅行という形で叶えるものです。どのような医療処置が施されている方にも対応可能なようで、医療面でも動き始めていることを知りました。

高齢化社会が加速する中で、人生の最期について考え方が少しずつ変わってきていることを知れました。

とても貴重なお話をありがとうございました。7つのゼロが、他の施設でも今後広まっていくことを願います。